

忘却された子た



日本の底辺、ふきだまりの人生をゆく西成益ヶ崎に暴動が起きてから一ヶ月余りの日がすぎた。地元も、警察も、府も市もヒタイをあつめてスラム地帯の総合対策へのりだした。ヤミ手配師の一掃と公設職業紹介、医療設備の拡充、低家賃アパートの建設、生活相談所、防犯相談、児童福祉のための生活館等々。

しかし、益ヶ崎暴動はそこに住む子どもたちの幼い胸に、大きなショックを与えたのではなかろうか。無謀な大人の行為が、これから育つてゆく子どもの上にどう影響があらわれるか心配である。おとなへの不信を深めたか、あるいは共鳴する試金石であったのか……。いずれにしても、この騒ぎの中に“忘却された子たち”の問題が気にかかる。

金ヶ崎暴動とは、八月一日夜、老日雇の自動車事故の処置の仕方に端を発して、たけりたった数千の群衆が西成警察署へ投石、交番やパトカーの焼き打ち、走る一般のタクシーにも乱暴をした事件で三日三晩つづいた。最初、警察側が低姿勢でいると、地元に巣くうヤクザたちは「オレたちのシマを守る」と、獵銃をぶっぱなし、日本刀をふりまわし、群衆とヤクザの真夏の狂乱をしづめるのにお巡りさんも大変な御苦労であった。



に遊びふける。
ラムネ玉で遊ぶ。
道路の理屈はどういうべきであります。
彼等は洗濯場で遊ぶ。
低所得階層の人たちが流れこむスラム地帯では、
生活があろうと子どもたちに構つておれない。
地元の親のあど
バランバターン、ベットアンバラン、
チャンバラン、ベットアンバラン、
カクレバラン、
かくれんばなど、
地元の親のあど



金ヶ崎みたいなところばかりはない。貧しいながらも心ゆたかに生活す
ヨセ屋の集団もある。勤労意欲と社会意識
めざめた人々は、祈りの心でその底辺に生
る。ベニヤ板で仕切られた狭い部屋の片隅
子どものためのコーナーがあったことは、
あたまる希望の灯だ。

金があればあるかぎり酒をのみ、パンコや私設競輪に熱中し、うまいものでも腹いっぱい食ってから死にや本望だ、くらいに考えているような住人多い不幸な地域。子どもたちにとつは、善と悪の判断すら教えこまれない貧困地帯である。



釜ヶ崎の住人は、推定で約四万人。住民登録をしない、いわゆる“無籍者”が一万人もいるといわれている。それが、約三百軒にちかいドヤやアパートに住んでいる。この中で約六千人が日雇に出るという。日雇に出ない連中は、亮春、ポン引き、シケはり、立ちん坊、暴力団、麻薬、窃盗、恐喝など犯罪につながる黒い生活と、その日その日をどうにか生きてゆけばよいというだけが多いそうだ。

社会学者はこの地域を「社会解体地域」とよぶ。彼等は、非組織的で、生活の意識をもたず、庸無的で衝動的で、つよい劣等感とその裏がえしの正義感もみせる。“肌えているから働く”のであって、酒がのみたくなから労働をしない。労働意欲は少く、余分の収入があつても貯蓄など者えない。スマッシュの問題のむづかしさ根の深さに悲観的な見方もある。しかし、世間一般の所得倍増ブームの底におき忘れられた彼等の、この反社会的なエネルギーは、どうしたらまともな方向にむけられるのだろうか。



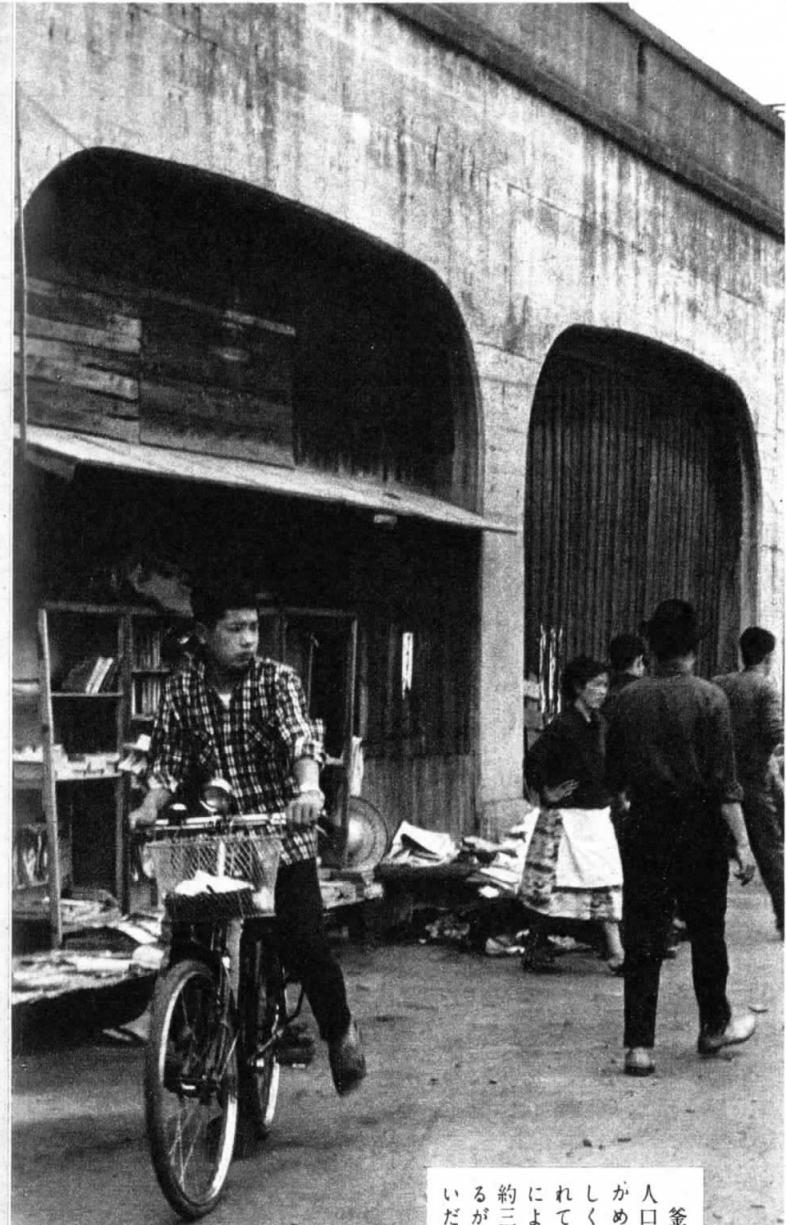
大阪の夏はむしょに暑い。特に夕なごのたそがれ頃からのむし暑さが、逃げ場のない人たちの非衛生な環境が狂気をみちびくのかもしれない。



スラム地帯はその生活を明るくすることではなく、スラムを解消する方向にもつてゆくことが根本的な対策である。そこに福祉国家としての希望と夢がある。



こんどの暴動にまきこまれた子どもたちのほとんどが、忘れてならないのは、ここに巣立つ数千人の子どもたちの教育の問題である。大都市のまん中にある不就学児地帯、こんな生活を現代社会が放つておいてよいものではない。スラム浄化も、次の世代に希望をかけて、この子らを守つてゆこ
うではないか。



釜ヶ崎地帯の正確な人口動態は役所でもつかめない。記録もとぼしく、推定だけでなされているようだ。登録によると、釜ヶ崎には約三千人の子どもがいるが、事実はもっと多いだろう。

釜ヶ崎には、一敗地にまみれた生活のために、世の荒波をさけて、最低の生活に甘んじながら住んでいる人もある。そうしたこの子どもたちは孤独だ。貧しさが子どもをかまわなくならう。親は稼ぎにいそがしく、放り出された子どもたちは、道路で遊んでいてもすぐ近よってくる。人なつこい目でじっと相手を見る。



この子らに愛の手を！

力の発達した目で観察してから、キレイといふと、すぐ友だちのように親しみせる。どこにあっても子どもの世界があるのである。この子らが無事に成長することを祈りにも似たきもちでものである。

